

**留学先国名** : ハンガリー

**留学先学校名** : ブダペスト商科大学

**留学期間** : 平成 26 年 9 月 2 日 ~ 平成 27 年 2 月 1 日

私はハンガリーという東欧の国へ半年間の交換留学を経験しました。留学先としてオーソドックスな英語圏の国ではなくヨーロッパを選んだのは、一度により多くの国籍を持つ学生に出会いより多くの価値観に触れることで、視野が大きく広がるのではないかと考えたからです。期待通り、留学生活は新しい出会いと発見の連続でした。私が滞在したブダペストは非常に教育水準が高い街で、総合大学、商科大学、工科大学、医科大学等たくさんの大学が集まり EU 圏内の留学先として人気の都市です。もちろんブダペスト商科大学にも各国から優秀な生徒が集まっており、一つの教室の中に世界地図が出来上がりそうなほど多国籍です。授業の内容は国際経済・経営の基礎的なものが多いですが、そこから内容がグローバルなものに広がっていきます。EU 域内貿易と対外貿易やユーロ危機が他国からどのように評価されているか等、ヨーロッパ・アラブ・ロシア・ブラジル人に囲まれた活発な議論の中で日本人の私は語学力・知識の両サイドから自分の意見をうまく発することが出来ず大変悔しい思いをしました。自分自身の不甲斐なさだけでなく他の学生が日本を知る機会を奪ってしまっていることに申し訳なさを感じ、政治や経済に関わるニュースを英語で読んだり見たりして語彙力を増やすようにしていました。「君が初めての日本人の友達だ」と何度も言われることがあったほど珍しく、そして世界中の人からよいイメージを持たれている日本人の代表として接するにあたってでたらめなことは言えず、分からないことは調べてから伝えるようにしていると、その姿さえも勤勉だと捉えてもらえました。ドイツ人には「そのうち僕たちが日本の GDP を抜くよ」と宣戦布告をされ、フランス人とイタリア人はお互いに自分の方がお洒落だと言い張っています。日常の何気ない会話の中に相手をリスペクトしながら自国を一番愛するプライドを持っている学生が多いように感じました。学校から歩いて 5 分ほどの学生寮ではほとんどが現地の学生で、ハンガリー生活の基本的な事は全て寮の学生から教えてもらいました。近くのスーパーで買い出しをし共同キッチンで集まって料理をすることもありました。また、寮から 10 分ほど電車に乗ればすぐ世界遺産という場所で歴史を身近に感じながら生活することができたのもハンガリー留学の醍醐味でした。通りや駅、広場の名前に歴史上の有名人や王様の名前が多く使われています。ブダペスト市内の地下鉄 1 番線は世界で 2 番目に古い地下鉄で、列車内でも面影も年月を感じさせてくれます。市内を張り巡らされた地下鉄、トラム、バスの交通網は 24 時間運行で治安も良いので、友人と遅くまで語り明かしても無事に帰宅することができます。また国外への交通も便利で、片道 3000 円以内でほとんどのヨーロッパ国へ旅行できます。私は滞在中、バスでポーランド・オーストリア・チェコ、LCC でスペイン・イタリア・フランス・イギリスへ旅行しました。ポーランドへは個人ではなく学生団体旅行に参加したので、アウシュビッツ強制収容所を訪れた際にドイツ人・フランス人などと各国の戦争に対する思いを交換することができ、旅行ではなく修学旅行のような体験だったなと思っています。国や細かい認識は違えど、みな口々に発する「絶対に繰り返されてはならない」という意見は世界共通の願いでした。また

イギリスのロンドンへは年越しのカウントダウンをするために訪れました。ロンドン留学をしていた大学の先輩と彼の友人のスペイン人と合流し、何時間も寒さに震えながら待つ新年を迎えた瞬間はとても嬉しく、友人達や見知らぬイラン人とハグを交わしました。一年の計は元旦にあり。国際的に迎えた 2015 年もさらに国際的な一年になると思います。

それは、自分が本当に多文化や多様性を知りたいと思っているか、そのために多少の困難を乗り越えようと思う強い意志があるかどうかです。「地震ってどんな感じ？地面が揺れるんだよね？体験してみたいなあ」「どうしてそんなにたくさんの国にビザ無しで旅行できるんだ？なんで日本人だけ優遇されてるんだよ」本人達は悪気の無い、単純な疑問から生まれる質問でしたが、私にとっては衝撃的なものでした。驚きさえしましたが、価値観やそれぞれの国の状況の違いをもう一度頭に浮かべ、感情ではなくデータとして質問に答えました。自分が知っていること、信じているものは相手にとって当たり前ではないのです。留学とは現地の言語や生活を学ぶだけでなく日本や私たち自身のことを知ってもらう機会でもあると考えたいと思います。そして、私は留学を経験したからこそ、現地の生活や学校での環境に適応することが出来ず悩む学生や帰国してしまう学生を目にしてきました。でもその時に現地学校の留学生受け入れ担当の職員の方や、ルームメイト、ホストファミリーに相談することができる人が本当に充実した留学生活を送ることができる人だと思います。言語、通貨、生活様式全てのことが違う土地に行っても、そこで暮らしているのは同じ人間です。みな同じようなことで喜び、笑い、怒り、悩むのです。喜びを分かち合い、辛い時に助け合うことに言語は必要ないことを知っておいてほしいのです。ただ文化を知るのではなく、そういった周囲の人の目を通して文化や歴史を知ることができるのが机上の勉強ではなく留学の醍醐味だと思います。